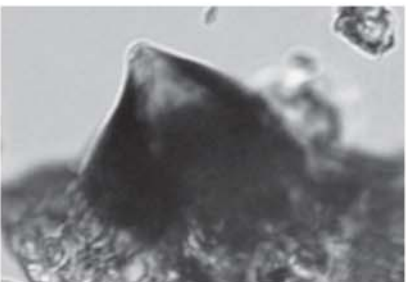


### 只見の歴史を探る④

#### 古い時代の自然環境を知る

発掘調査で掘り出される土壌の中には、土器や石器のほかに、目に見えないくらい微小な花粉の化石やイネ科の植物に含まれる植物珪酸体の化石が混じっています。近年の町の発掘調査では、この花粉や植物珪酸体の化石の分析を行っています。これによって只見地方における古い時代のおおよその気候や植生が推定できるからです。昔の環境を調べることを環境考古学とい

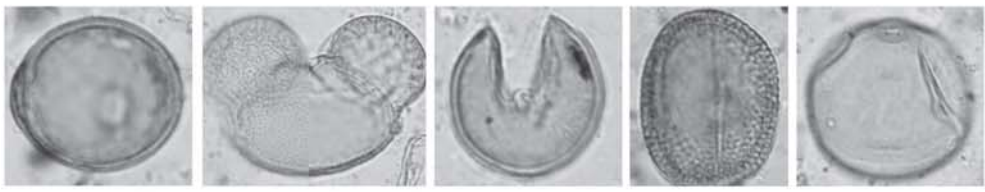
一方、黒谷館跡遺跡の堀跡からは、イネ科のほかに、ブナ属、スギ属、マツ属、アズキ属、ベニバナ属、ソバ属の花粉の化石や多数の種子が出土し、学術的に価値ある場所となりました。堀跡の堆積層は、一番深い層が十六世紀（室町時代の終わり）で、



▲ イネ科の珪酸体化石(黒谷館跡遺跡出土)

小林の七十苜遺跡では、弥生時代初めの土器にイネの籾の痕跡がある籾痕土器が発見されています。そこで、ここの土壌中か

らイネの花粉や珪酸体が発見されれば、只見町でも二千年以上前から稲作を行っていたことがより確実になると考え分析を行いました。しかし遺跡地は伊南川が氾濫して堆積した砂質土壌であることから、微小な化石は流出しているようで良好なデータを得ることはできませんでした。



▲ 左から、ブナ属、マツ属、スギ属、ソバ属、イネ科の花粉化石(いずれも黒谷館跡遺跡出土)

のことから黒谷館跡付近では室町時代の終わりから江戸時代初頭においては、現在と似た

森林植生だったことがうかがえます。ただし、スギ属については現在よりも少ないと推定されました。興味深いことは、一番深い室町時代の終わりの層にアズキ属やベニバナ属が検出されたことです。また、ソバ属などもみられました。つまり、黒谷館が使われていた時代には、イネ科のほかにアズキ属、ベニバナ属、ソバ属などが栽培されていた可能性が高いことがわかりました。ソバは現代でも栽培されていますが、一番浅い層ではソバ属はほとんど検出されませんでした。

さらに、堀跡からは、植物種子が二七個も発見されました。オニグルミ、ヒメグルミ、モモ、スモモなどの種子の殻で、当時の食生活がしのべれます。今後このような分析データが集積されることによって、只見町における古い時代の自然環境を推定することができるようになると思います。